



税の大切さについて学びました ～租税教室～

7月13日(月)に税理士の菊地克昌先生をお招きして、6年生の租税教室を行いました。税金の種類や仕組み、その大切さについて、クイズ形式で子供たちに考えさせながら分かりやすく教えていただきました。

興味深かったのが、途中でこのような問題がありました。年収の違う3人の中から90万円の税金を集めるには、どの人からいくら税金を納めてもらえばよいか、という問題です。年収がAさんは600万円、Bさんは300万円、Cさんは100万円という設定です。3クラスで回答が違って面白かったです。1組の回答が、年収の割合と同じ6:3:1になるようにするという一番数学的な考え方のように思いました。2組、3組のように、ある程度きりのよい数字に設定するという考え方もあると思います。菊地先生からも「正解はありません」との説明がありました。改めて税金について考えるよい機会となりました。



1組は①、②、③ 2組は④、⑤、⑥ 3組は⑦、⑧、⑨	6年1組	6年2組	6年3組
年収の収入	600万円	300万円	100万円
納める税金の額	①:54	④:56	⑦:50
A	2:27	5:25	8:30
B	3:9	6:10	9:10
C	90万円	90万円	90万円

自分の命を守る学習 ～着衣水泳～

7月16日(木)本宮小学校プール納めの日に、6年生が着衣水泳について学びました。服を身につけたまま水に入ってしまうような状況になったとき、どのようになるのか体験的に学びました。

この日の学習課題は「水に落ちた時の、命の守り方を身に付けよう」というものでした。「自分が落ちたときの訓練」「落ちた人を発見した場合の訓練」「水中での行動の困難を体験」という順番で学習していきました。最後は、大切なまとめとして「無理をしない。過信をしない。浮いて助けを待つ。」ということを確認して今年度の水泳学習を終了しました。



校長室の窓から (子供は急いで変えると……………)

「子供は急いで変えると〇〇〇」この最後にどんな言葉が入ると思いますか。これは、私が30代の頃に読んだ有田和正氏の「1年担任の実力と責任」(明治図書)という著書の中にあった言葉です。有田氏は日本を代表する社会科教育・授業研究の実践家として有名な先生です。この著書の中に、次のような一節があります。

わたしがこれまで担任した一年生の中には、必ずいろいろな「侍」がいて、楽しませてくれた。朝、登校してくると、通り道になっている隣のクラスの中を通り、そこら辺りにいる子どもの頭をコツンコツンとたたいてから自分の教室にくる。自分の教室に入ると、近くにいる子どもをなぐるか、けるかしながら自分の席に着く。(中略)さて、どんな手をうてばよいか、と考えた。ちょっと手をやきそうだが、それだけに楽しみがある。楽しみは、ゆっくり味わった方が得である。だから、急いで指導してしまうともったいない。そこで、わたしの指導計画は「七月までに何とか直す」ということにした。つまり、一学期間くらい、この子に楽しませてもらいたいと考えた。

子どもは、急いで直すと、すぐもとにもどる。
と、これまでの体験からいえる。

この言葉は、私の指導に対する考え方にかかなり大きな影響を与えました。子供を本当の意味で変えるには一定の期間が必要です。表面的な部分だけ直そうとすると、結局もとに戻ってしまうという意味だと思います。子供たちが自分で考えて正しい判断や行動ができるように、時間をかけて指導していきたいと考えています。